

東西遊記

2

橘 南 谿
宗政五十緒校注

東洋文庫

249

平凡社

東西遊記
2

橘 南 谿
宗政五十緒校注

むねまさ い そ お

宗政 五十緒

昭和4年岡山市生。

昭和33年京都大学大学院文学研究科博士課程修了。

現職：龍谷大学（文学部）教授。

専攻：国語学・国文学。

主要編著書：『西鶴の研究』（未来社），『近世京都
出版資料』（日本古書通信社），『近世崎人伝・続
近世崎人伝』（平凡社）など。

東西遊記2 〔全2巻〕

東洋文庫 249

1974年3月25日 初版第1刷発行

1979年10月1日 初版第5刷発行

定価 1,200円

校注者 宗政 五十緒

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下 中 邦 彦

印刷 株式会社 共立社印刷所

製本 株式会社 石津製本所

発行所

郵便番号 102 東京都千代田区四番町4番地

振替・東京8-29639 株式会社 平 凡 社

©株式会社 平凡社 1974
Printed in Japan

不良本は、直接小社サービス課で
お取替え致します(送料小社負担)

凡 例

一、本書の底本は次のとおりである。

1 東遊記、東遊記後編、西遊記、西遊記続編は、それぞれの版本。

2 東遊記補遺、西遊記補遺は、竜谷大学図書館蔵東遊記、西遊記それぞれの写本。ただし、両補遺はともに底本の版本不載の章のみの抄出である。

二、本文作成に当っては次のごとき方針に従った。

1 (イ)東遊記、東遊記後編、西遊記、西遊記続編、と、(ロ)東遊記補遺、西遊記補遺、とではその方針に若干の違いがある。この点、本書の利用者の注意を請うところである。それは――。

(イ)の諸本は、近代刊行の校注本が存するので、本書では今日の読者に読み易いように配慮した。

(ロ)の諸本は、今日まで翻刻されたことのない文献であるので、研究者の利用にも供しうるように配慮した。

2 右の(イ)、(ロ)に共通する本文作成の方針は次のとおりである。

イ 原文に用いられている古体、異体、略体などの文字は、現在通行の文字に改めた。

ロ 原文にあった濁点に、更に校注者によって濁点、半濁点を付加した。

ハ 原文には句読点はないが、校注者が新たに加えた。

ニ 漢字表記の疊字は「々」に変えた。

ホ 通読に便利なように新たに段落を切り、行を改めた。

ヘ 固有名詞の類などには、通読の便利を配慮して、その本文の右側に（ ）を付して注を加えた。
 ト 原文の使用漢字で、現在の使用慣例と大きく異なるものは、その本文の右側に（ ）を付して現在使用の漢字を注した。

チ 原文にはないが、本文の通読に便利であると思われる点は（ ）を付して注した。

リ 本文の右側に付することが字数などの都合で困難な校注者の注は、番号を付して各章の本文の次に掲げた。

ヌ 東遊記三書、西遊記三書にそれぞれの全章の通し番号を新たに付した。

ル 原本の挿絵はすべて収め、原本の掲載に近い本文の箇所に乗せた。

3 (イ)のみに必要とした本文作成の方針は次のごとくである。

イ 原文の仮名遣いは、和歌、俳諧、歌謡、漢詩文を除いて、すべて現代仮名遣いに改めた。

ロ 原文にあった漢字表記の振り仮名に、更に、校注者により適宜、振り仮名を付加した。

ハ 送り仮名は原則として、現在通行の慣用に準じて不足の場合はこれを加えた。ただし、連語では上の語の送り仮名は原則として加えなかった。また、用言の名詞化した語にも原則として送り仮名は新加しなかった。なお、原文が現在通行の慣用から見て送り過ぎになっているものは、送り過ぎの原文のままにしておいた。

ニ 仮名の豊字はもとの文字に改めた。

ホ 表記の明らかに誤りと思われるものは、これを改めた。

へ 漢文表記の部分には、校注者がその本文の次に（ ）を付して読み下し文を付した。
ト 底本の次の部分は掲載位置を変更した。変更した部分と原位置は――。

い 松本愚山撰「東西遊記序」は『東遊記』の巻頭。

ろ 伴蒿蹊撰「東西遊記序」は『西遊記』の巻頭。

は 「凡例」は松本愚山撰序文の次。

に 「目録」は、

『東遊記』は「凡例」の次。

『東遊記後編』は巻一の巻頭。

『西遊記』は伴蒿蹊撰序文の次。

『西遊記統編』は卷之一の巻頭、各巻の巻頭。

4

(四)のみに必要とした本文作成の方針は次のごとくである。

イ つとめて原文に忠実なるように心がけた。ただし、通読の便を考慮して、2 以外に、更に以下のごとき校注者の私意を加えた。

ロ 漢字表記の左傍に付してあった振り仮名は、「」を付して、これを右傍に移した。ただし、右傍に振り仮名が付されてあった場合には、その下に移した。

東西遊記 序 (原漢文)

(石見介) 石州別駕橋君、医ヲ攻ムルヲ以テ四方ニ漫遊ス。足跡殆ンド天下ニ遍シ。其ノ記載スル所、
オオム 率ネ皆、修治ノ案、經驗ノ方、而シテ嘉債有レバ則チ必ズ咨イ、人卓行有レバ則チ必ズ訪ウ。
 名山ニ登リ、古蹟ヲ覽、殊俗ヲ歴問シ、異聞ヲ搜采スル者数十卷ニ及ブ。名ヅケテ東西遊記
 ト曰ウ。好事家、往々之ヲ伝誦シ瞻写シテ藏シテ以テ帳中ノ秘ト為ス者有ルニ至ル。書賈因
 リテ屢々刻ヲ請ウ、君終イニ肯ンゼザル事久シ。一日俄カニ余ニ語リテ曰ク、此ノ書ノ行ワ
 ルルヤ吾ガ意ニアラザル也、何トナレバ蓋シ家業ノ著述猶未ダ稿ヲ脱セザル者居多也、而シ
 テ首トシテ兔園ノ冊ヲ用イテ木ニ災ス、恐ラクハ有識ノ誚ヲ致サン、而シテ坊間利ヲ射ルノ
 徒、私刻ヲ謀ル有ルニ会ス、是ニ於イテ已ム事ヲ獲ズシテ遂ニ剽竊ニ授ク、將タ之ヲ奈何、
 盍ンゾ吾ガ為ニ一言ヲ書シテ以テ卷端ニ弁ラシメザルト。余乃チ竊カニ謂イテ曰ク、夫ノ橋
 君、人ト為リ道ニ志シ行ニ励ム、旁ラ唐詩ヲ好ミ国風ニ及ブ、鐘律ヲ考エ、星度ヲ試ム、其
 ノ医ヲ為スヤ固ヨリ亦小伎ニ隠ルルノミ、而ルニ況ンヤ此ノ書其中ニ就キテ特ニ又、緒余ナ
 ル者ヲヤ、然レドモ善ク是ノ編ヲ読ム者、以テ秉彝ノ良心ヲ興起感發スベクンバ則チ是レ元
 氣ヲ還ス也、井蛙ノ見ヲ破リ、夏虫ノ疑イヲ釈カバ則チ是レ沈痼ヲ起コス也、其ノ人ヲ医ス
 ルノ効亦捷シ、必ズシモ刀圭ノ間ニ事トセズ、此レ豈ニ、世ノ游ヲ紀ス蔓詞弥文ノ徒ニシテ

風月ノ談ヲ資ケ觸^{シヨウ}咏^{ウエ}ノ具ニ供^{ソナ}ウルノミナル者ト曰ヲ同ジウシテ語ルベキヤ、君其レ多ク讓ル
 事勿^{ナカ}レト。是ヲ序ト為ス。

寛政乙卯^(七)歲秋八月

愚山

松本 慎

松本
慎印

愚山

東西遊記 序

史遷^{しせん}が跡を追いて名山大川を探るは丈夫のしわざなるべし。しかはあれど、官ある人は身を意にまかせず、処士は路費にとぼし、いかにともすべからずとなん、謝肇淵^{しゃちやうえん}がなげきはさることなり。はた是にくわうるに、いとかたきことなんかずかずあるべき。まず心剛に、身健ならざればあたわず。旧記をしらざれば勝地の感なし。文学にもしければ録すべからず。かく取あつむることのかなわねばにや、ここにはさる人もしるせる文もいとまれなり。むかし郡県の政なりし代、国々の守^{かみ}、掾^{じよう}などにてくだれりし人々、歌よみしたる所々は、名所とて今も聞ゆれど、時うつりて、ありしにもあらぬが多く、国々の風土記といえるも大かたにほろびたれば、其由^{よし}もまたしられず。中頃に能因^{のういん}、西行^{さいぎよう}の両法師などこそけしかるさかいへも執行^{しゆぎよう}せられぬと聞こゆれど、紀行こまやかならず。後には宗祇法師^{そうぎ}あれど、是も名だたる所斗^{ばか}りをあらあらしるされたれば、其けしきさえ明らかならず。まして土風、人情をや。わずかに熊野山中の小児が米をしらず、越路の雪に妖怪のあらわれしなどいえるたぐいのみぞ、僻境のおもむきをしるのよしにはありける。ここに此西東遊記は橘君子の著^{あら}わす所にして、其質かのかたきことどもをかね備えて、危を犯し、嶮^{しほ}を凌ぎ、年月を重ね、実をもて録するところなり。其勇其志感ずるにあまりあり。はた仁義を基とせる物から、所々忠孝の人の行

状を記し、政の善惡をもおもわしむるは、一言半句の間にも人を勧むるの微意みゆるなん、
 世に希有なる書というべし。さるにある人のいう、此君子、人の為にはかるはよし、自らか
 えりみるにはいかに。其山川跋涉の間、幾たびか死地に入られたりしは、王陽がにくむ所、
 命をしるものは巖牆のもとにたたざるのいましめにもたがえりと。予いう、然り、しかれど
 も、志とところあるものはまたかからずは其志成るべからず、孔夫子の宋に窘しみ、陳蔡に厄
 し給いしも、みちを天下に施してんの志によりて也、仏徒にしては玄牝三蔵のごとき、流砂
 の難を犯されけるにこそ、其願はなりけらし。今、橘君も其身をわすれて、医療の術を極め、
 ひろく世を救い、遠く後にほどこさんの志なれば、其間には北方の強もまじるべけれど、其
 過はみずからしりて、門生の詩にも感悟せられたれば、他の口を入れるべからず、およそ此筆
 記を得て、居ながらに千里の外をするは、又なきたまものならずや、まいて、おのれは若き
 より遠遊のねがいにはありながら、其かたはしにも及ばで、今はいたずらに頭の霜を重ね、閨
 の埋火をたのむのみなれば、わきて此記に心酔せりとなんこたえ侍りき。ついにこれをする
 して橘君によせ侍るは、序ともなりなましや。

閑田子 蒿蹊^(作)

棹湖 書

雪南

湖棹

凡 例

一、予、医学修行の為に漫遊まんゆうする事、前後合わせて五年、東西南北いた到らざる所なし。然るに此書ただ只、東西遊記と名付くるものは、京を日本の中央ちゆうおうとし二つに分かれて東西とし、南北は其中にこむるもの也。

一、予が漫遊、もと医学の為なれば、医事にかかれることは雑談ざつだんといえども別に記録して、同志の人にも示しめす。只、此書は旅中見聞りちちゅうけんもんせる事を筆のついでにするせるものにして、強しいて其事の虚実きよじつを正さず。誤あやまりしるせる事も多かるべし。見る人、其杜撰ずざんをとがむことなかれ。

一、此書中にしるせる事、其事々々に付きて思い考かんがうることも多けれども、わざと此書には愚按ぐあんを加えず。議論取捨ぎろんしゆしやは見る人の心にあるべし。

南 谿 誌

装
幀
原

弘

目次

凡例	1
----	---

東西遊記序(松本愚山撰)	xi
--------------	----

東西遊記序(伴蒿溪撰)	xiii
-------------	------

凡例(橋南谿誌)	xv
----------	----

西遊記

卷之一

一 檜垣の女(熊本)	三
------------	---

二 牛の生皮(鹿兒島)	四
-------------	---

三 榎木の大蛇(熊本)	六
-------------	---

四 猪の狩倉の大蛇(熊本)	六
---------------	---

五 琵琶の妙手(鹿兒島)	七
--------------	---

六 知らぬ火(熊本)	二
------------	---

七 権馬(宮崎)	六
----------	---

八 石敢当(鹿兒島)	九
------------	---

卷之二

九 冷暖玉(大分)	二
-----------	---

一〇 孔明の陣太鼓(長崎)	四
---------------	---

二 飯野の風穴(宮崎)	六
-------------	---

三 康頼夫婦対面(鹿兒島)	三〇
---------------	----

三 鼈竜(長崎)	三
----------	---

四 十六日桜(愛媛)	三
------------	---

五 魂祭(長崎)	五
----------	---

六 渡り鶴(鹿兒島)	六
------------	---

七 獵犬(鹿兒島)	七
-----------	---

卷之三

元	長江の旅泊（長崎）	完
元	山女（宮崎）	四
二	求麻川（熊本）	四
三	竜門の滝（鹿児島）	四
三	山童（鹿児島）	四
三	玳瑁（長崎・鹿児島）	四
四	一足鳥（熊本）	四
五	麝香鼠（鹿児島）	五
六	寿夭	五
七	神楽（高知・宮崎）	五
八	いろは（宮崎）	五
元	篤実（広島）	五
三	仙人（熊本・鹿児島）	五
三	孝行（鹿児島）	五

卷之四

三	流人（鹿児島）	七
三	阿蘇山（熊本）	七
四	仁斯に至る（鹿児島）	七
五	奴僕（宮崎）	七
卷之五		
三	天の逆鉾（鹿児島）	八
七	目鏡橋（長崎）	八
元	家猪（広島）	八
元	地獄（長崎）	八
四	東海氏の墓（長崎）	八
四	清正公（熊本）	八
四	山汐（鹿児島）	八
四	与治兵衛瀬（山口・福岡）	八
四	景清が母（熊本）	九
四	卓子（長崎）	九
四	鐘乳穴（岡山）	九

西遊記 続編

卷之一

卷之三

瓦 流れ物（三重）	二三
六 竜鐘を愛す（福岡・熊本）	二三

瓦 碑文（三重）	二五
瓦 吹上の浜（鹿児島）	二七
瓦 オガ島（東京・三重）	二〇
五 古朴（鹿児島）	二三
五 曾根の松（兵庫）	二三
五 小田の木仏（熊本）	二七
五 扶桑木（愛媛・長崎）	二八

卷之二

六 嬉し野（佐賀）	二四
三 鼠島（熊本）	二四
三 徐福（三重・和歌山）	二四
六 陽気（熊本）	二四
三 濁酒（鹿児島）	二四
六 姥が嶽（大分）	二五
七 牛合（鹿児島）	二五
六 饑饉	二五
六 隠戸の瀬戸（広島）	二七
七 鍛冶祐定（岡山）	二八

卷之四

五 熊胆（熊本）	二三
五 鷗嶋（熊本）	二三
五 孟宗竹（鹿児島）	三四
五 五ヶ邑（熊本）	三六
五 毀誉	三〇

七 那智の瀑布（和歌山）	二六
三 桂林（三重）	二六

出来島（鹿兒島）	一六
肥後の毒水（熊本）	一六
豆腐の怪（鹿兒島）	一六
高麗の子孫（鹿兒島）	一七
竜の玉（鹿兒島）	一七
那須（熊本）	一七
海水増減（鹿兒島）	一七

卷之五

楓の樹（長崎）	一八
唐画の桜（鹿兒島）	一八
綱引（鹿兒島）	一八
産婦（鹿兒島）	一八
奇器（オランダ）	一八
劍の舞（鹿兒島）	一八

西遊記 補遺

武者修行（熊本）	一九
六親の和（長崎）	二〇
青葉の笛竹（鹿兒島）	二〇
学信和尚（広島・愛媛）	二〇
義烈（鹿兒島）	二二
広平の地（佐賀）	二八
邪祟（熊本）	二九
琉球人（鹿兒島・沖縄）	三三
仁政（熊本・宮崎）	三三
三原の会（広島）	三四
池山喜三左衛門（鹿兒島・清国）	三四
尾上の鐘（兵庫）	三五
董其昌（清国）	三五
愚痴（鹿兒島）	三五
方言	三五
絵踏（長崎）	三五

二〇三 文運（長崎・熊本・鹿児島）……………二五

地域別項目索引……………卷末